

序章 3

第一部 佐々木六角氏と家臣団

第一章 戦国時代佐々木六角氏の動向 15

はじめに 15

一 高頼期 17

(1) 応仁〜文明年間 17

(2) 長享〜明応年間 19

(3) 明応〜永正年間 21

二 氏綱期 24

三 定頼期 28

(1) 明応〜大永年間 28

(2) 大永〜享禄年間 30

(3) 天文年間 38

四 義賢／義弼期……………45

(1) 天文・弘治年間 45

(2) 永祿年間 46

(3) 観音寺騒動以降 52

第二章 佐々木六角氏家臣団の実像……………66

はじめに……………66

一 六角氏家臣団の分析……………67

(1) 御内書・陣立等に見える家臣の個別検討 70

(2) その他の家臣 78

二 六角氏家臣団の分類……………88

(1) 「陣立」・御内書に見える者 88

(2) その他の家臣 90

(3) 奉書の署判者 93

おわりに——六角氏家臣団と『六角氏式目』——……………97

補論 戦国期佐々木六角氏家臣名の再比定……………117

第三章 佐々木六角氏家臣団の結合形態……………126

はじめに……………126

一 相論の前提……………127

二 芦浦安国寺相論……………130

(1) 後藤氏の借錢 130

(2) 相論の展開 133

(3) 争点の変化 138

三 家臣団連合の実像……………141

(1) 経済的困窮 142

(2) 「親類」と「間柄」 143

(3) 家臣間紛争に対する当主の位置 147

おわりに……………149

第二部 佐々木六角氏と領国

第四章 佐々木六角氏領国の莊園三村庄とその代官……………155

はじめに……………155

一 三村庄について……………156

(1) 成立と伝領過程 156

(2) 位置 156

(3) 東寺の掌握していたもの 157

二 三村庄の代官	165
おわりに	201

第五章 佐々木六角氏と近江国内外交通

はじめに

一 六角氏権力と保内・枝村紙荷相論

二 六角氏と北伊勢

(1) 十五世紀末の六角氏と北伊勢

(2) 梅戸氏の掌握

(3) その他の伊勢国人の掌握

(4) 本願寺証如と大館常興の認識

三 六角氏と領国内交通

(1) 琵琶湖水運

(2) 京都との関係——特に東口関所をめぐって——

おわりに

第六章 佐々木六角氏発給文書と領国

一 問題の所在

二 戦国期「室町幕府—守護体制」論の再検討

- (1) 守護代伊庭氏と室町幕府 240
 - (2) 六角氏と幕府奉公衆朽木氏 246
 - (3) 伊勢における六角氏 250
- 三 地域権力の確立——発給文書の分析から——
- (1) 領国内諸勢力と六角氏発給文書 252
 - (2) 村落における相論・裁判 260
- おわりに

終章

附編 戦国時代佐々木六角氏関係記録史料集(稿)

成稿一覧
あとがき
人名索引

序章

戦国大名佐々木六角氏は、宇多源氏の流れをくむ平安時代以来の名族で、中世を通じて近江国に盤踞した大名であり、近江国の中世における重要性和相まって、歴史上のさまざまな事件にも深い関わりをもつ存在であった。にもかかわらず、その実態を明らかにする研究はかならずしも活発とはいえない。大きな理由としては、第一に史料の散在性があげられる。第二には室町將軍による二度の六角征伐、観音寺騒動における混乱や、織田信長入京時の惨敗という、およそ「強力な」戦国大名とはみせない印象的な事件の影響があげられる。つまり、そのような弱体大名は研究対象としては魅力がなかったということなのであろう。

しかしながら一方において、六角征伐を切り抜けた後の六角氏が、畿内政治史において重要な位置を占めていることは認められているところである。⁽¹⁾特に近年、細川京兆家や畠山氏、さらには三好氏の研究が進んだこと⁽²⁾で、ますます六角氏研究の重要性が浮上している。そこで本書では、戦国大名六角氏の実態関係の確定および実態の究明を目的としたい。

その前提として、以下、戦国期六角氏についての先行研究を、「六角氏権力」〔今堀日吉神社文書関係〕〔六角氏式目〕にわけて整理してみたい（いずれも六角氏を直接の検討対象としているものに絞り、一事例として触れるのみのはとりあげなかった。また一次史料によらないもの、一般向けの論著も対象とはしない）。

まず、戦前の研究であげるべきは、中川泉三編『近江蒲生郡志』⁽³⁾である。大正時代に刊行したものであるが、その史料の博搜と広範な叙述は驚異的で、あまりの出来映え故に、いまだに参考文献としてあげられる程である。六角氏の概要についてはここで明らかにされたものが多い。しかしながら、軍記・系図も取り混ぜての叙述、また根拠不明瞭な論断があるのはやむをえないところである。

戦後、いち早く六角氏について論じたのは、横山晴夫「中世末期に於ける六角氏の動向」⁽⁴⁾である。初めて記録類を中心とした通史的な叙述を行ったが、紙幅が限られていたのであろうか、質・量とも概説の域を出ていない。その後しばらくは、後述の勝俣鎮夫論文以外、六角氏に触れた研究は見られないが、一九七五年、宮島敬一が、近江甲賀郡国人山中氏と六角氏を題材として、一揆的構造の解明を目的とした「荘園制と『地域的一揆体制』」⁽⁵⁾を著し、その中で六角氏の評価にも及んでいる。これ以降、六角氏を対象とした研究が徐々に見られるようになる。同じく宮島による「戦国期における六角氏権力の性格——発給文書の性格を中心にして——」⁽⁶⁾では、初めて家臣奉書を収集して分析、これを六角氏権力の根幹文書と位置づけた。しかし、家臣名の比定については事実誤認も多く、対象にした山中氏の事例は、戦国時代最末期の限られた期間のもの、という点を考慮しておらず、問題意識先行といわざるを得ない。

下坂守「近江守護六角氏の研究」⁽⁷⁾は、南北朝・室町期を中心に、「分郡守護」の問題等、「守護領国」という観点から分析、また今谷明「近江の守護領国機構」⁽⁸⁾も下坂論文とほぼ同時期の「守護」の問題を論じている。また、折からの自治体史刊行ブームの流れの中で、『新修 大津市史』⁽⁹⁾『八日市市史』⁽¹⁰⁾が出版され、高水準の通史が著されたことも特筆すべき件である。

一九八〇年、前掲宮島論文を受けて、細溝典彦「六角氏領国支配機構の変遷について」⁽¹¹⁾が発表された。これは六角氏の「支配機構」を南北朝期～戦国期に涉って検証したものである。その手法は宮島と同様、当主六角氏、伊庭氏および家臣の発給した文書を収集・分析しているが、結論としては、家臣団の一揆結合を重視している。また高頼期のみにつづいた同様の研究に、松下浩「戦国期六角氏権力に関する一考察」⁽¹²⁾もある。

今岡典和「戦国期の幕府と守護——近江守護六角氏を素材として——」⁽¹³⁾は、戦国期六角氏研究に初めて幕府との関係を取り入れたもので、結論として戦国期の六角氏を「室町幕府—守護体制」内の存在と見るべきと主張しているが、本書第六章で述べる通り問題がある。幕府との関連でいえば、奥村徹也の「戦国期六角氏の湖西における訴訟裁定」⁽¹⁴⁾「天文期の室町幕府と六角定頼」⁽¹⁵⁾も重要である。この両研究は、それまでほとんど論究されることのなかった天文期における六角氏と室町幕府との関係、幕府における六角定頼の位置を、初めて具体的に明らかにしたものである。

さらに、六角氏家臣団については、その実態究明を目的とした村井祐樹「戦国期六角氏の奉書署判者について——大名発給文書理解の前提——」⁽¹⁶⁾、具体的な結合形態を分析した、同「戦国期畿内近国における在地領主間相論と大名権力——統一政権成立の前提——」⁽¹⁷⁾がある。さらに家臣発給の副状については、今岡「守護の書状とその副状」⁽¹⁸⁾があるが三者ともに文書を発給している家臣の家名比定の誤りがあり、訂正を要する。

最近では、新谷和之「戦国期六角氏の地域支配構造——地方寺社への関与を手掛かりに——」⁽¹⁹⁾が、近江蒲生郡長命寺に残された帳簿を題材に、丁寧な作業に基づき、土豪層の実体解明を行っている。また六角氏領国の交通を問題とした、村井「戦国大名六角氏と近江国内外交通」⁽²⁰⁾、六角氏権力発給文書の領国内における意義を論じ、「室町幕府—守護体制」を批判した同「戦国大名六角氏発給文書の領国内における価値」⁽²¹⁾がある。

附編

戦国時代

佐々木六角氏関係記録史料集(稿)

一、本附編には、戦国時代（応仁元年〜元和六年）における六角氏当主・一族および家臣に関係する記録史料を収めた。採録史料は一次史料たる古記録に限定したが、年代記や儀式次第等の一次史料に準ずるものも入れてある。但し、下用帳の類は除いた。また、参考のため寛正年間の『碧山日録』の関係記事を冒頭に掲げた。

二、『大日本史料』に採録されている記録は、該当記事を収めている綱文のみを掲出し、出典を（『大日』八一三）のように示した。ただし、編者の判断で史料本文を採録したものもある。

三、本文の翻刻は、可能な限り写真・影写・謄写によって行ったが、一部刊本によったものもある。

四、引用史料の一部を省略した場合、中略部分のみ表示し（○中）、上略・下略部分は原則として示さなかった。

五、引用史料の一つ書き（一）、天気および一部の後筆は省略した。ただし、「光源院殿御元服記」中の一つ書きは残した。

六、漢字の字体は常用漢字を用いたが、一部正字体も使用している。また、変体仮名は現行の仮名に改めた。

七、文中には適宜、読点・並列点を施した。

八、誤記と思われる箇所・欠損等で推測可能なものには（ ）をもって旁註を付した。また誤記箇所（ママ）を付した場合もある。

九、人名については、原則として毎年の初出箇所に（ ）をもって旁註を付した。但し、以下の六角氏一族（佐々木）・家臣には付さなかった。

・六角高頼：亀寿丸・四郎・大膳大夫（寛正元年〜永正十八年）

・六角定頼：彈正少弼（霜白）（明応九年〜天文二十二年）

・六角義弼：四郎・右衛門督（天文十三年）

・大原（小原）高保：中務大輔（中書）（天文）

・進藤貞治：新介・山城守（永正十三年〜天文二十年）

・平井高好：右兵衛尉・加賀守（大永年間〜天文年間）

一〇、出典の書名は原則として、刊本に採用されている等、一般に通用している書名を使用した。

一一、文書を引用する場合、『戦国遺文 佐々木六角氏編』収載分については、【遺文***】として、本文は省略した。

寛正元年（一四六〇）

七月、

十八日、

〔碧山日録〕

江州太守六角某殺其家臣伊庭子、

廿八日、

〔碧山日録〕

六角某謁大相公、伊勢某以公命斥其謁、蓋無辜以殺其

家臣伊庭子也、乃与其騎従出奔於叡岳之西麓小原里、

遂入僧舍、剃髮成僧也、

廿九日、

〔碧山日録〕

大相公命故六角 之子（高頼）龜寿、為家嗣、是日謁相公也、

前年知私讎之不可報、不勝憤恨、自割其腹死、龜

寿為孤、逃難於外邑、此拳属保身耳、時君子曰、龜子

克守己待時、美矣哉、

閏九月、

寛正元年 寛正三年 応仁元年

六日、

〔碧山日録〕

江州太守某、以源相公命、禦守宇治橋、蓋備畠山義就之兵也、

寛正三年（一四六二）

正月、

三日、

〔碧山日録〕

年々是日黄幡（襖）之勤、佐々木両家、曰六角、曰京極、互

為焉、茲歲六角当之、然而河内之陣而未班其師、京極

之勝秀以公命勤之云、

応仁元年（一四六七）

五月、

廿日、

勝元、持豊、各其党与を招集す、是日、持豊、義就等、

管領斯波義廉の第に会議す、時に勝元の党を東軍と呼び、持豊の党を西軍と称す、〔大日〕八一―

廿六日、

勝元、武田信賢、細川成之等をして、西軍の将一色義直の第を攻めしむ、交戦累日、互に死傷あり、寺社第宅多く災に罹る、〔大日〕八一―

六月、

二日、

東軍の将京極持清等、西軍の将六角高頼等と戦ふ、

〔大日〕八一―

三日、

〔経覚私要抄〕

京都事、夜前自随心院大乘院へ被申云、只今ハ両方勢

立合在之計也、(政豊)山名方ハ大名十一頭、(勝元)細川方大名十八

同心云々、

(斯波義廉)山名方ニハ管領(義就)武衛・畠山右衛門佐・一色・土岐・六角・

(幸千代)富樫・山名相州・仁和寺(山名方)・岩見守護(山名二族)・畠山

大夫云々、

四日、

〔経覚私要抄〕

早旦元次男来、夜部下向畢、京都事先無殊事云々、山名・武衛・右衛門佐・一色・土岐・六角・富樫・畠山大夫・山名相模以下同意、無替齋前哉、(最)(式)

八日、

義政、義規に命じて、持豊を討たしむ、斯波義廉、六角高頼、土岐成頼等降を乞ふ、是日、東軍の将赤松政則、山名教之を一条大宮に撃ちて之を破る、京極持清、朝倉孝景と戦ひて敗退す、〔大日〕八一―

八月、

八日、

是夜、六角高頼、自ら其第を火く、〔大日〕八一―

廿日、

東軍の諸将、義廉の第を囲むもの、大内政弘の入京せんとするを聞き、營を火きて退く、〔大日〕八一―

九月、

十日、

〔経覚私要抄〕

西忍入道語云、夜前四条時衆道西所へ罷下、京都之儀色々演説云々、六角者六角大慈院取陣、畠山右衛門佐等持寺取陣、土岐御屋形移住云々、

廿一日、

六角政高入京し、東山に陣す、〔大日〕八一―

十月、

十七日、

六角高頼の兵、京極持清の兵と、近江馬淵に戦ふ、〔大日〕八一―補遺)

応仁二年(一四六八)

三月、

廿八日、

京極勝秀、六角高頼の部下を観音寺城に攻む、〔大日〕八一―

応仁二年 文明二年

四月、

廿六日、

東軍の将六角政高の部兵、近江長光寺城を守る、西軍の将六角高頼の兵、襲ふて之を取る、〔大日〕八一―

十一月、

五日、

東将佐々木四郎、六角高頼の属城近江守山を攻めて之を陥しいる、尋で、京極持清の兵、亦、観音寺を攻む、城兵或は逃れ、或は降る、〔大日〕八一―

文明二年(一四七〇)

九月、

廿二日、

京極高清の部将多賀出雲守、其族高忠と隙あり、叛て六角高頼に合し、西軍に应ず、高忠、伊勢に走り、関盛元に依る、〔大日〕八一―

序章 新稿

第一部

第一章 新稿

第二章 「戦国期六角氏の奉書署判者について」(『日本史研究』四四九、二〇〇〇年)を大幅に改稿増補

補論 「戦国期佐々木六角氏家臣名の再比定」(『日本歴史』七三五、二〇〇九年)を改稿

第三章 「戦国期畿内近国における在地領主間相論と大名権力」(『ヒストリア』一七二、二〇〇〇年)を改稿

第二部

第四章 「東寺領近江三村庄とその代官」(東寺文書研究会編『東寺文書と中世の諸相』思文閣出版、二〇一一年)

(年)

第五章 「戦国大名六角氏と近江国内外交通」(『近江地方史研究』四二、二〇一一年)に加筆・修正

第六章 「戦国大名六角氏発給文書の領国内における価値」(『古文書研究』七二、二〇一一年)に加筆・修正

終章 新稿

附編 新稿

(なお、初出時の誤植・誤字・史料引用の誤りは、可能な限り訂正してある)

あとがき

本書を刊行するにあたり、これまでお世話になった全ての方々には満腔の謝意を表します。中でも、職場である東京大学史料編纂所の鴨川達夫氏・末柄豊氏・高橋敏子氏には特に篤く御礼を申し上げます。

直属の上司である鴨川氏には、入所以来『大日本史料 第十一編』の編纂を通じて、「編纂者魂」を教わり続けています。出版のたびに訪れる「読み合わせ」は、帯状疱疹の出る程厳しいモノであるが、実に楽しい作業でもある。齢四十を過ぎて、脳味噌から脂汗の出る史料読みをさせていただけの環境というのは、世界広しといえどもこの場しかないであろう。にもかかわらず、十数年やっても一向に編纂精度が上がらず、鴨川氏に対しては目次第もない。中途半端な蒐集癖と「開き直り」しか持ち合わせない人間ということで、御勘弁願いたい。

当代随一の碩学末柄豊氏にも御迷惑のかけっぱなしである。どんな初歩的で頓珍漢な質問でも、常に懇切丁寧にお答えいただいております。「こんなことも知らないの?」「自分で調べろ!」と思っておられるのは承知しているのだが、わずか二十メートル歩くだけで全ての疑問が氷塊するという誘惑には勝てない。ちなみに、本書の附編作成にあたっては、末柄氏から様々なご教示をいただいている。それでも到らぬ点が多々あると思うが、全て私の責任である。

高橋敏子氏には、今回出版社をご紹介いただいただけではなく、普段から読めない字を読んでいたたり、お詳しい京都方面の情報をいただいたり、その他もろもろ甘えさせていただき、誠に申し訳なく思っている。

以上のお三方以外にも史料編纂所の教員(二部除く)・技術職員・図書職員・事務職員の皆様方にはご迷惑の懸けどうしである。この場を借りてお詫びとお礼を申し上げます。

(株) 思文閣出版には、このようなニッチな書物を出版していただき、ありがたく思うとともに、売れ行きを考えるとたいへん心苦しい。また、編集を担当していただいた田中峰人氏には、史料引用が多く、首尾一貫しない悪文にお付き合いいただき、さらにはどうでも良い小さなこだわりにも適切に対処していただいた。同じく、お詫びと共にお礼を申し上げます。もし本書が多少でも読めるものになっていたらとすれば、田中氏のお陰である。最後に、勝手気ままな変人を(に?) 育ててくれた両親と、そんな変人と生活を共にしてくれている妻陽子および二人の息子に謝辞を述べることをお許しいただきたい。

二〇二二年一月二八日

村井祐樹

なお本書は、独立行政法人日本学術振興会平成二十四年度科学研究費助成事業(科学研究費補助金(研究成果公開促進費))の交付を受けて刊行されるものである。

	り	六角備中入道	161
良賢	169, 170	六角政勝	17, 18, 79
了承	194	六角政堯	17, 18, 78, 198, 221
	ろ	六角政綱	18
六角氏綱	15, 23, 24, 25~30, 86, 87	六角満綱	178
六角氏頼	80, 160, 244	六角持綱	144
六角定賢	56	六角義賢(承禎)	15, 38~44, 45, 46~49, 52~56, 70, 72, 73, 81~87, 89, 90, 94, 127, 128, 132, 136, 138, 208, 214, 216, 229, 230, 263~265
六角定頼	15, 23, 28, 29~45, 68, 72, 75, 77~80, 83, 84, 89, 95, 119, 120, 127, 211, 215~218, 228, 250, 251	六角義賢夫人	42
六角定頼室	31	六角義弼(義治, 義堯, 玄雄)	15, 42, 45, 47~49, 52, 53, 55, 56, 70, 72, 80, 82~84, 86, 87, 89, 90, 122, 127, 128, 229
六角定頼娘	39		
六角高頼	15, 17, 18~21, 23~26, 28, 30, 67, 72, 73, 75, 79, 82, 86, 198, 210, 211, 221, 222, 241, 243~247, 255	わ	
六角久頼	17	若狭法眼	189
		若宮氏	18

蜷川親元 76, 222, 241, 246

の

野田五郎左衛門 171
能寺(野寺)氏 86, 120, 121, 123
能登氏 69, 86, 91, 94
能登忠行 86, 118, 120, 121, 122, 223, 224
信慶 79
野矢氏 73

は

梅叔法霖 78
畠山氏 3
畠山九郎 40
畠山基家 21
畠山義総 40, 42
畠山義総娘 40, 45
蜂屋氏 161~163
蜂屋範宗 160
林氏 156
林さう三郎 175, 176
林時光(光能) 162~164, 165, 168~175, 177

ひ

久継 124, 255, 256
久政 254
久松 191
平井氏 40, 42, 78, 79, 88, 93
平井掃部助 78
平井定武 49, 78, 89, 90, 94, 127, 128, 144, 224, 226
平井高明 78
平井高好 39, 68, 78, 213, 263, 264
平井孫八郎 78
備後公 179

ふ

深尾七郎左衛門尉 119, 120
布施氏 36, 53, 86, 90, 91, 143
布施公雄 49, 86, 89, 90, 133, 135, 136, 207
布施貞友 86
布施十郎左衛門 86

ほ

宝寿院瑞松 29
法忍房 171
牧隠齋瑞用 29
細川氏 3, 23, 39, 45, 268
細川氏綱 45
細川勝元 246
細川刑部太輔 53
細川成春 19, 221
細川澄元 30
細川澄之 27
細川高国 30, 31, 33~38
細川尹賢 33, 34
細川晴元 34~39, 41~45, 68, 69, 127
細川備州 241
細川政元 20, 21, 24~26, 222, 243
細川元明 45
細川元親 22
細川頼元 178
堀三郎 161
堀遠江守 69
堀秀信 184
本間右馬允 131, 132, 136

ま

松井 35, 36
松田孫右衛門尉 250
松永甚介 44
松原氏 86
松原弥兵衛 86
馬淵氏 18, 23, 33, 67, 69, 71, 73, 83, 144, 161, 182, 192, 201, 245
馬淵宮内少輔 71
馬淵源右衛門 71
馬淵源兵衛 71
馬淵重綱 68
馬淵建綱 71
馬淵道寛 168
馬淵豊前 71
馬淵宗綱 71

み

三上氏 31, 33, 39, 69, 75, 76, 88, 91, 93, 123, 127, 128, 143, 161
三上恒安 68, 76, 133, 135, 136
三上士忠(栖雲軒) 75, 76, 132, 207, 263
三上頼安 75, 123, 222, 247, 248, 255, 256
三雲氏 33, 37, 68, 73, 83, 84, 86, 88, 124, 128, 132, 144
三雲賢持 73, 74
三雲定持 69, 73, 74
三雲三郎左衛門尉 208
三雲成持 73, 74, 131, 139, 140
三雲新左衛門尉 55, 56
三雲資胤 68, 73
三雲忠将 73
三雲正将 73
水原氏 87, 91
水原氏家 87
水原加賀守 87
水原橘左衛門 87
水原長門守 87
三井氏 68, 72, 144, 182, 183
三井将鶴 72, 73
三井高就 68, 72, 73
三井治秀 73
三井又五郎 72
三塚氏 87, 90
三塚高德 87
三塚又次郎 87
美濃部氏 56
宮木氏 73, 87, 90, 91, 94, 122, 124
宮木賢祐 87, 207
宮木新次郎 87
宮田氏 213
宮野氏 193
明義 173, 174, 175, 176~182
三好氏 3, 37, 40~45, 47, 50, 52, 54, 70, 142
三好三人衆 53, 54
三好長慶 45, 46, 52, 69, 70, 127
三好義継 45

め

目賀田氏 47, 68, 73, 82~84, 122, 161
目賀田越後守 121, 122
目賀田貞遠 73, 120, 122, 223, 225, 226
目賀田次郎左衛門 73
目賀田孫次郎 68

も

毛利氏 117
望月氏 18

や

薬師寺長忠 25
薬師寺元一 25
安富元家 20, 243, 268
柳本氏 33, 37, 40
柳本賢治 33
山内氏 21, 74, 80, 90, 91
山内就綱 21, 23, 80
山内宮内大輔 80
山内信詮 80
山内政綱 17, 20, 21, 80, 201
山崎氏 68, 69, 76, 77
山崎新三郎 77
山科氏 42, 45, 195, 198, 227, 228
山科言継 209, 227
山科持俊 195
山中氏 4, 19, 56, 87, 95, 145, 210
山中筑前守 254
山中俊好 56, 75, 145
山名氏 17
山名教之 17

ゆ

遊阿ミ 182, 183

よ

横瀬氏 214
横山氏 32, 69, 261
吉田兼右 45, 46, 53

近衛植家 31, 48, 229
 近衛政家 24
 伯氏 84, 90, 91, 143, 144
 伯右兵衛尉 85, 136, 137
 伯賢 136, 137
 伯定 49, 85, 89, 90, 133~136
 伯三郎兵衛尉 85, 134, 138, 140
 伯修理亮 85
 伯頼 84
 伯丹後守 84, 214
 伯孫三郎 135
 五郎四郎 195
 金蓮院 180

さ

西園寺氏 169, 171
 斎藤氏 18, 21, 49, 50, 90
 斎藤丹波 22
 斎藤道三 49
 斎藤利国 22
 斎藤義龍 47, 48, 229
 佐久間氏 55, 71, 74~76
 佐治氏 46
 佐野氏 18
 三条実香 34
 三条大納言 171
 三条西実隆 27, 31, 34, 73, 85, 123
 三宝院義賢 194
 三宝院満濟 186

し

重信 124, 222, 255
 慈光院 28, 47
 慈寿院 46, 54, 89
 十竹軒中脛 133, 135, 136
 柴田氏 55, 74
 嶋郷孫次郎 201
 島津氏 117
 下笠氏 18, 39, 69, 74, 75
 下笠弼実 75
 下笠美濃守 75
 下笠弥七 75

下笠頼実 68, 75
 しやうえん 163
 寂室元光 258
 浄円 172~174
 正教坊 230
 正行坊 179, 180
 浄見 201
 勝光寺光瓊 31
 正光坊賢運 230
 浄聡 187
 浄藏 189~193
 乘南 193
 証如 39, 44, 84, 213, 217, 250
 定祐 160
 次郎 79
 進士晴舎 35
 進藤氏 40~42, 55, 71, 74, 78, 79, 82, 88, 94, 95, 209, 213
 進藤賢盛 75, 127, 128, 130~141, 143~145, 147, 208, 226
 進藤河内守 74
 進藤貞治 35, 44, 68, 74, 95, 249

す

杉山氏 29, 79, 119, 120, 161
 杉山三郎右衛門 79
 杉山三郎兵衛 119
 杉山三郎右兵衛 119

せ

善秀 244

そ

莊藏坊 241
 増長院義宝 176, 177, 179

た

多賀出雲 18
 高井祐尊 177, 181
 高倉氏 77
 高倉殿 161
 高祐 87, 124, 247, 248, 255, 256

多賀高忠 18
 高野瀬氏 68, 78
 高野瀬家澄 76
 高野瀬七郎左衛門 76
 高野瀬承恒 76
 高野瀬備前守入道 76
 高橋氏 143
 高橋紀介 143
 多賀豊後守 17, 242
 尊頼 254
 武田氏 32, 56
 武田国信 243
 武田元光 32
 建部氏 127
 立川氏 196, 197
 田中氏 69
 田中貞隆 131, 132
 種村氏 31, 85, 90, 91, 94, 122, 123
 種村賢仍 85, 123, 127
 種村五郎兵衛 85
 種村貞和 85, 123, 249
 種村貞誠 85
 種村兵部丞 85
 田能村氏 208, 217, 218, 251
 田能村弥四郎 207
 為信 194

ち

千草氏 85, 91, 208, 209, 215~217
 千草有吉 85, 217
 千草三郎左衛門 208
 仲覚 247
 朝怡 81

つ

筒井順興 43
 堤新左衛門尉 241

と

遠山氏 49
 富樫介 243
 土岐氏 18, 21, 22, 24, 39, 41, 49, 50

土岐次郎 20
 土岐政房 22
 土岐元頼 22
 土岐頼芸 47, 48, 89
 徳川家康 56
 百々氏 46
 鳥羽法皇 156
 豊臣氏 56, 72
 曇全 247

な

永田氏 72, 143
 永田伊豆守 69
 永田右京亮 72
 永田氏弘 68
 永田景弘 72, 127, 128
 永田賢弘 72, 133, 135, 136
 永田刑部少輔 68, 72
 永田高弘 72
 永田孫次郎 72
 長野氏 79, 212~214
 長野植藤 213
 永原氏 41, 42, 55, 68, 77, 82, 88, 124, 264
 永原重興 77, 263, 264
 永原重澄 77
 永原重隆 69, 77
 永原重虎 77
 永原重秀 77
 永原筑前守 77
 中原康富 144
 鯨江氏 86, 90, 91
 鯨江満介 86, 140
 樽崎氏 18, 69, 70, 144, 182, 183
 樽崎賢道 78
 樽崎内膳 78

に

仁木貞長 243
 西川又次郎 119
 西佐々木越中 21
 蟻川氏 42, 85
 蟻川親俊 25, 41

伊庭貞説 26, 70
 伊庭修理亮 241
 伊庭出羽守 70
 伊庭入道 172
 伊庭八郎 161, 242, 243
 伊庭満貞 188
 伊庭満隆 194
 伊庭若狭守 245
 楯斐五郎 48

う

上野氏 40
 上野信孝 52
 上原賢家 243
 宇津呂氏 156
 宇野教意 190, 191~193
 宇野教賢 193, 194, 195, 197
 宇野教林 180, 181, 182~190
 梅戸氏 79, 90, 211, 213~216
 梅戸右京亮 212
 梅戸貞実 211, 212
 梅戸治部少輔 79
 梅戸高実 41, 79, 211
 浦上宗景 36

え

海老名高助 35
 円満院門跡 156
 円明 163, 164
 円良 172, 173

お

大河原氏 182, 184
 大木氏 214, 217
 大木孫太郎 214
 大館常興 33, 34, 40, 41, 218, 228, 251
 大友氏 31
 大野氏 142, 143
 大原氏 56, 79, 80, 87, 90, 91, 144
 大原高賢 82
 大原高定 56
 大原高保 30, 79, 80, 83

隠岐氏 33, 81, 90, 123
 隠岐賢広 81, 122, 123, 224~226
 隠岐忠広 81, 123, 223, 248, 249, 262
 奥村氏 122
 奥村源七郎 122
 小倉氏 73, 81, 82, 216, 244
 小倉右京亮 82
 小倉右近大夫 82
 小倉越前守 82
 小倉左近 82
 小倉左近助 82
 小倉実詮 82
 小倉実恒 82
 小倉弾正 81
 小倉長寿 82
 小倉弥三郎 82
 織田氏 50, 55, 71, 72, 74~78, 82, 83, 99, 126, 150
 織田信長 3, 8, 46, 54~56, 71, 78, 83, 127, 148
 落合氏 81, 90, 91
 落合家光 81
 落合出雲守 81, 263
 落合八郎左衛門尉 81
 落合八郎兵衛尉 81, 140

か

戒上 185~188, 192
 片岡氏 82
 片岡善左衛門 82
 堅田衆 53, 219, 220, 223~227, 276
 蒲生氏 23, 30, 37, 69, 71, 72, 82, 88, 93, 128, 143, 144, 245
 蒲生氏郷 72
 蒲生賢秀 72
 蒲生貞紀 71
 蒲生貞秀 67, 71, 245
 蒲生定秀 49, 71~73, 89, 90, 94, 122, 143
 蒲生秀紀 30
 河井氏 82, 195, 201
 河井紀伊守 82
 河井貞康 82

河井左馬允 82
 河井重久 195, 196~200
 河井新次郎 82
 河井駿河守 82
 河井又五郎 82
 河毛氏 82, 245
 河毛中将 82
 河毛綱光 82
 河毛美作守 82
 神崎氏 82, 90
 神崎右近助 83
 神崎左京亮 83
 神崎下総守 83
 願西 160, 165, 168

き

儀雲示教 44
 木沢氏 37
 木沢長政 37, 41
 紀田氏 196, 197
 北畠氏 210, 244
 紀田孫左衛門 194, 195
 北村与三左衛門尉 264
 北山氏 81
 木村氏 83
 久阿ミ 198
 京極氏 17~19, 21, 31, 32, 38, 44, 45, 69, 81, 91, 242, 244, 245
 京極勝秀 17
 京極高清 22
 京極高広 68, 69
 京極高慶 69
 京極導誉 175
 京極秀綱 243
 京極政経 18, 20
 京極持清 18
 教林坊円秀 230

く

楠氏 208, 209
 朽木氏 24, 31, 33, 69, 83, 84, 90, 95, 142, 222, 240, 246~250, 252

朽木植綱 32, 35, 36, 68, 72, 249
 朽木植広 250
 朽木直親 247
 九里氏 27, 30, 83, 84, 120, 192, 196, 197
 九里源兵衛 83
 九里次郎 245
 栗田氏 46, 73, 84, 90, 94
 栗田定政 84
 栗田実勝 84
 栗田修理亮 84
 黒川氏 84, 254, 255
 黒川修理亮 254, 255
 黒川与四郎 254

け

景徐周麟 28, 29, 245
 源内左衛門 161

こ

洪恩院 215
 杲覚 195
 上坂定信 69
 杲淳 181
 興禅寺 48, 229
 光泉坊玄珍 230
 香庄氏 84, 196~198
 香庄賢輔 84
 香庄貞信 32, 84
 河野通直 52
 高師直 175
 虎藏主 118
 後藤氏 39, 52, 68, 71, 72, 74, 76, 77, 79, 85, 86, 88, 91, 93, 117, 118, 130, 135, 136, 144, 148, 216
 後藤氏豊 74, 127
 後藤賢豊 49, 74, 89, 90, 94, 127
 後藤定誉 74
 後藤高忠 74
 後藤高恒 68, 74, 117
 後藤高成 74
 後藤高治 74, 130~134, 137~143
 近衛氏 49, 50

◎著者略歴◎

村井 祐樹 (むらい・ゆうき)

1971年 東京都に生まれる
 1994年 早稲田大学政治経済学部政治学科卒業
 2000年 早稲田大学大学院文学研究科博士後期課程単位取得退学
 同年 東京大学史料編纂所助手
 現在 同所助教

〈編著〉

『戦国遺文 佐々木六角氏編』(2009年, 東京堂出版), 『戦国遺文 瀬戸内水軍編』(共編, 2012年, 東京堂出版), 『真如寺所蔵能勢家文書』(共編, 2010年, 東京大学史料編纂所研究成果報告2010-1), 『小寺家文書』(2011年, 同上2011-1) 『三澤家文書』(2012年, 同上2012-2).

〈論文〉

『松永弾正再考』(2006年, 『遙かなる中世』21), 『毛利輝元と吉川家——三本の矢, その後——』(2010年, 池享編『室町戦国期の社会構造』).

せんごくだいみょうき さきろつかくし きそけんきゅう
 戦国大名佐々木六角氏の基礎研究

2012(平成24)年12月24日発行

定価: 本体11,600円(税別)

著者 村井祐樹

発行者 田中 大

発行所 株式会社 思文閣出版

〒605-0089 京都市東山区元町355

電話 075-751-1781(代表)

印刷 株式会社 図書印刷
 製本 同朋舎

© Y. Murai

ISBN978-4-7842-1663-5 C3021

人名索引

註: 本索引は第一編・二編のみの人名索引である。但し、表・図・註の人名は省略した。
 本文中に見出しを立てた項目はその頁をゴシック表記とした。

あ	い
青木氏 80, 91	飯田新兵衛尉 247
青木右衛門 80	池田氏 74, 77, 88, 120, 127, 128, 144
青木忠右衛門 80	池田景雄 77, 120
青木入道 195	池田景世(真光寺周揚) 77
青木正信 132	池田定輔 77
青木三河守 241	池田次郎左衛門尉 118~120
青木弥四郎 241	池田新三郎 77
青地氏 68, 71, 76, 144	池田高雄 68, 74, 77, 117, 118~120, 123, 223, 263
青地茂綱 76	池田豊雄 77
青地四郎左衛門尉 68, 76	池田大和守 77
青地駿河守 75	伊佐入道 161
青地道徹 76	伊佐孫太郎 172
赤沢宗益 23	石丸利光 22
浅井氏 31, 38, 40, 44, 46, 50, 52~55, 69, 70, 72, 74, 76, 79, 91, 128, 142, 148, 225	伊勢氏 45, 49, 50, 75, 231, 241
朝倉氏 34, 41, 50, 55, 214~216	伊勢貞孝 47, 48, 229
朝倉賢茂 215	伊勢貞忠 31
朝倉孝景 33, 36	伊勢貞陸 243
朝山日乗 55	伊勢貞宗 26, 27, 41, 241
足利直義 160	一井氏 143
足利義昭 53~56	一井四郎兵衛尉 142, 143
足利義澄 21, 24, 26, 27, 30	一色義直 19
足利義植(義材) 20, 21, 23, 25~27, 30, 67, 71, 78, 80, 222	飯尾清房 247
足利義維 35	飯尾為種 220
足利義輝 38, 42, 43, 45, 47, 53, 72~74, 76~78, 80, 229	飯尾為行 220
足利義晴 30, 31, 33~35, 37, 38, 40, 41, 45, 68, 72, 77, 93, 227, 249	飯尾元行 247
足利義尚 19, 20, 222, 243	伊庭氏 17, 20, 23, 24, 27, 30, 47, 70, 71, 73, 83, 91, 94, 120, 123, 157, 173, 179, 182~184, 186~188, 191, 192, 195, 197, 240, 242~246, 258, 260, 262
足利義栄 54	伊庭左京亮 245
足利義政 19, 75	伊庭貞隆 19, 22, 26, 67, 70, 241, 254, 255, 256, 257, 261
飛鳥井雅俊 25	